

ティンゲルタンゲル

(手前の舞台の幕が開くと 奥の舞台の幕は閉まっている 第一ヴァイオリン奏者および二名の楽団員が、ブリキの譜面台を広げて立てたり、椅子を運んで来てそれにだらしなく座ったりしているのが見える。第一ヴァイオリン奏者が時計を見る。この時、四人目の楽団員が登場する)

第一ヴァイオリン奏者 急げ、急げ！ どうして遅刻したんだ？

楽団員四 こんなに暑いんだもの。(額の汗をぬぐい、麦わら帽子を脱ぐ。こわきに抱えていたジャンパーを椅子の上におき、腰かける。この時、五人目の楽団員が登場、びしょぬれの姿)

第一ヴァイオリン奏者 こりゃまた、どうしたんだ？ びしょぬれじゃないか。雨が降ってるのか？

楽団員五 土砂降りですよ。

(楽団員五が上着を脱いで腰かけると、カール・ファレンティンが登場する。毛皮のコート、山高帽、手袋を着け、全身雪まみれである)

第一ヴァイオリン奏者 たまげたね。どうなってるんだ？ 雪が降っているのか？

カール・ファレンティン ひどい大雪ですよ。

第一ヴァイオリン奏者 一人は汗をかいてる、二人目は雨だと言っ、そして、あんたは雪まみれだ。

KV 雨だなんて、誰が言っただんです？

第一ヴァイオリン奏者 そのミュラーさんがたっ、た今、土砂降りだって言っただ。

KV (ミュラー氏に) あの、どちらからいらしたんです？

楽団員五 テレージエン街から。

KV はあ、私はシュヴァンターラー峰からやって来ました。

第一ヴァイオリン奏者 くだらない話はやめた。脱ぎたまえ。

KV 全部？

第一ヴァイオリン奏者 いや、帽子とオーバーだけだ。(ファレンティンはそれらの物をピアノの上に置く) 待て、待て！ そこに置くんじゃない。その

雪で何もかもぬれてしまっぞ。

KV これは溶けませんよ、クリスマスツリー用の雪だから。

第一ヴァイオリン奏者 譜面台の準備をしたまえ。楽長さんが見えた時、用意がすべて整っているようにな。

(KVは腰かける。最後の楽団員が登場)

最後の楽団員 楽長はまだかい？

KV 今のところまだ来てない。遅れるんだろう。

最後の楽団員 誰かが遅刻するとすぐにどなるくせに、自分は遅れたっていいんだな、あの老いぼれ。

KV また上の店に座り込んでガバガバ飲んでるくらいのところだろうさ、あの酔っぱらい。

最後の楽団員 あの馬鹿、何にもできないんだぜ。楽譜だって読めないんだ。どうやってあいつが楽長として劇場に入りこんだんだか、訳がわからないよ。

KV 出まかせを並べ立てたんだろ あいつのできる事したらそんなところさ。あの苦虫じじい、音楽なんてでんでわからないんだから。

(楽長(リースル・カールシュタット)がそつと登場する。じつと聞いている)
最後の楽団員 今度あの馬鹿が頭に来るようなことをしたら、思い知らせてやるよ。あいつ、あれやこれやでもう六年はおかしいぞ。

KV いや、そんなもんじゃない、すでに六十年はおかしいぞ。
最後の楽団員(振り向いて楽長を見つけ、小さい声で挨拶する) こんにちは。(KVに、早口で)おい、さっさと楽譜の用意をしろよ、ベラベラしゃべくってないで。さもないと楽長殿が見えたとき準備ができてなくて、また怒らすことになるぞ。

KV いつからお前、楽長殿なんて言うようになったんだ？

最後の楽団員 いつだって楽長殿って言うてるさ。

KV こんな二枚舌野郎、初めて見たぞ。突然、楽長殿、だってよ。いつだって奴の悪口言ってるくせに。

最後の楽団員 そんなことないよ。楽長殿のこと、とやかく言ったことなんて一度もないさ。あんだら、六年も前からおかしいって言ったのは。

KV 俺は六十年前からって言ったんだ。

(最後の楽団員は困って咳払いをする)

K V どうしたんだよ、急に。何で口を利かないんだ？(他の人々に向かつて(どろ)してそんな顔してるんだ？ 俺の背中にまた何かぶら下げたのか？)振り向いて、楽長を見つける)

楽長 もう五分も前から聞いたよ。

K V そんなに前から？

楽長 老いぼれって誰のことを言ってたんだね？

K V 私の兄ですよ。

楽長 ほお、兄さんか　でも君、兄弟はいないって前に言ったことあったな。

K V ええ……

楽長 じゃあ誰のことなんだね？

K V 姉です。

楽長 はじめが兄さんで、お次は姉さんか。

K V その通りです。

楽長 それでわしはそれを信じるほど馬鹿って訳か？

K V その通りです。

楽長 いや、わしは馬鹿ではないぞ　君が誰のことを言ったかわかったら、ただじゃおかんぞ。

K V おわりにはならないでしょう。

楽長 まあ良からう　これでやめだ。こんばんは、皆さん。

楽団員全員　こんばんは、楽長殿。

楽長　こんな風にして自分の部下についてよく知るのもいいことじゃよ。あの男は面と向かったときにはいつもへつらうくせに、わしのいない所では悪口を言っとなるんだ。裏表のある奴だ。

K V　あなたが後ろに立ってるなんて知りようがありませんよ。

楽長　そりゃいけないな。君はみんなの中で最低の奴だ。

K V　みんなだって同じですよ。

楽長　楽譜はもう開いとるかね。最初の行進曲だ。

K V　二つ、しりー、きよくー！

楽長 何だつて？

K V 「ごうしんきょく」の語呂合わせ、何かご存じですか？

楽長 いいや。

K V 故新曲、今は亡き新曲です。

楽長 わしはまた、君がもつと別のことを考えたんだと思ったよ。

K V (思案するように) ああ、あれも語呂が近いですな。

楽長 さあ始めよう。きょうは、まさにわしの指揮通りに演奏せねばならんぞ。

K V そんな風にはできませんね。そんなことをしたら乱暴狼藉つてことで五年はくらいますもん。

楽長 静かに！ きょうは、わしの指揮通りにやってみるんだ。それがいやな人は出てつてくれ。(全員立ち去ろうとする)どこへ行くんだ？

K V みんないやなんですよ。

楽長 わしの方だつてずっと前からお前らがいやさ。まあ、座るんだ。

K V フラウヒヤーの時には音楽はうまく行ってたんだ。あなたがいつだつて仕損なつてるんですよ。

楽長 おい、君はまさかフラウヒヤーの音楽と、このオーケストラを比べるんじゃないだろうな。フラウヒヤーのところがそんなに良かったのなら、何で上にずつといかなかったのかね？

K V やれやれ、働かなきゃならない場所で私の気に入る所なんてありやありませんよ。私は英国の中の中国にまで流れていったんですよ。

楽長 それはどこにあるんだ？

K V 中国庭園の中の英国塔の中ですよ。訳注 ミュンヘンの英国庭園には中国塔があり、ピヤガーデンになっている。

楽長 ほお。それで、そこじゃ何人いたんだね？

K V ええ、十、ほぼ十一でした。

楽長 十か十一のどっちかだろ！

K V 十一では絶対にはいりません。

楽長 それじゃ、十だな。

K V いや、八本でした。

楽長 何だつて？

K V だいたい八本でした。

楽長 八本の人間、そんなの聞いたことないぞ。八本の葉巻とか八本の白ソーセージなら知つとるが。

K V うん、うん。

楽長 まったく、食べ物の話になると、こいつ元気づくんだから。その八名のところで君は何の楽器を吹いていたのかね？

K V 吹くんじゃなくて、金集めの方だったんです。

楽長 では、一度やってみよう。それで、もしうまく行かなかつたら、いったんやめる。

K V 今すぐやめにしましょうや。

楽長 そうはいかんぞ！ 用意はいいか、今度こそ本当に始めるぞ。

K V 休憩を？

楽長 何、休憩？ 何で休憩なんだ。誰が休憩なんて言った？

K V あなたが今おっしゃいませんでしたか？

楽長 わしが？ わしは休憩なんて考えてもなかつたぞ。君が言ったんだろ。

K V 私が言いましたか？

楽長 その通りだ。今、言ったじゃないか。

K V 道理で。それで聞こえたんですね。

楽長 最初から休憩だなんて、そうはいかんぞ。それじゃ何もでけん。さあ、始めるぞ。(指揮棒で譜面台をたたく)

K V 待つて 咳がまだ出そう。

楽長 今まで咳をする時間いくらでもあつたのに、今頃そんなことを言い出しおつて。ほら、早くしてしまいなさい。待つてやるから。さっさとやれ。どうしたんだ。(全員、K Vの方を見ながら待つ)

K V 今、出ないようです。

楽長 (指揮棒で譜面台をたたく。フォリー・ベルジェール・マーチが演奏される。K Vは一回、間違え、もう一人のトランペット奏者の方を指し示し、最後に一拍遅れて吹く) 何を今ごろ、吹いとるんだね。もう曲は終わつとるぞ。

K V 私、遅れて始めたものですから。

楽長 後から吹く音符なんてどこにあるのかね？

KV 誰が後から吹いたんです？

楽長 君が吹いただろう！

KV 私が？

楽長 もちろん君だ。

KV そんな。

楽長 厚かましいぞ。今、音を一つ、後から吹いたじゃないか。

KV 後から吹きやしませんよ。きつとこだまです。

楽長 こだまなんかありゃしない。

KV もちろんありますよ。音楽を急にやめると上の方に余韻が残るでしょ。

歌を歌って急に止めたときもまったく同じです。こだまが聞こえます。耳をすまして下さい！（歌う）小鳥が飛んで来て、留まったわ、私の足に。（間。舞台の背後から「足に」という声が聞こえる）聞こえました？ こだまですよ。

楽長 くだらん！ 森の奥へ向かって歌えば、こだまも返るさ。でも、ここじゃ、こだまなんてありえん。であるからして、君が後から吹いたのだ。もういい。

KV そうですよ、こんなことで長々争うことないですよ 私の後から吹いたんですか、それともこだまだったんですか？

楽長 あれはこだまじゃない。君が後から吹いたんだ。

KV じゃあ、私はやめさせていただきます！

楽長 よろしい、君はやめるんだな。

KV アルフォンスに聞いて下さいよ、私が後から吹いたかどうか。

楽長 アルフォンス君、言ってくれ、こいつが後から吹いたんだよな？

アルフォンス そのことじゃ口を割りませんか。だって、もしこいつがやめるんだったら、僕だって残ってたくありませんから。

KV ほら、そしてこいつがやめたら、他のみんなもやめますよ。そしたら、あんだ、蓄音機でも買っんですな。

楽長 その方がまじだろうよ。少なくともももつ怒らなくてすむ。

KV でも、ネジを巻きすぎてバネが切れたら、おしまいですよ。それに俺たち、あんだが俺たちの労災手帳にそのへんの茶色いシールをただ貼りつけて

たつて訴えますよ、このぺてん師。

楽長 何てこと言うのかね。(白髪の楽団員に)君は一番の年長者だ。言ってくれ、こいつが後から吹いたのか、それともあれはこだまだったのか。

白髪の楽団員 あれはこだまでした。

楽長 出て行け!(観客に向かつて)皆様すみませんが、音楽上の論争なんです。あの男が後から吹いたんですか、それともこだまでしたか?

観客 こだまだ!

楽長(あきらめて) わしの負けだ。 さあ、歌手の登場だ。この婦人には弦楽で伴奏するんだぞ。トランペットではうるさすぎる。

(楽団員全員が弦楽器を手取る。KVはトランペットとヴァイオリンを持つ)

楽長 弦楽つて言つたらう。自分の格好を見てみる。(KVは自分の飾り胸当てをまっすぐに直し、ズボンから穴をぬぐい取ろうとする)何をぬぐい取ろうとしているのかね。 それは穴じゃろう。

KV ベンジンでなら取れるんですがね。(今度はトランペットとヴァイオリンの弓を持つ。最後にやっとヴァイオリンと弓を持つが手が逆である)

楽長 逆だぞ! 君、酔っぱらってるんじゃないか?

KV 今のところまだです。

楽長 じゃ準備はいいな、歌手が歌いたがっているぞ。

KV 私たちのためになら歌うことありませんよ。

楽長 君たちに聞かせるのではない、お客様のために歌うんじゃない。

(鐘の合図とファンファール。奥の舞台の幕がわずかに動くが、開かない)

劇場支配人(舞台上に登場) 楽長さん。幕が開かないですわ、こわれてて。

楽長 どうして直さないんだね。

劇場支配人 あたしには直せません。

楽長 世界中探せば幕を直せる奴くらい、見つかるだろつ?

KV 黒幕を探せ!

楽長 内装工事屋つてのがいるだろつ。 それを呼んでくるんだ。

劇場支配人 どこに住んでるのかわからないんですよ。

KV どこに住んでいようと同じですよ。

楽長 同じじゃない。それがわからなくちゃどうしようもない。

KV 工事人は自分の住まいを知ってるんだから、聞けばすむでしょうに。

楽長 どこにいるのか知らないのに、どこで聞けっていつのかね。

KV 通りで会うんじゃないですかね。

楽長 馬鹿らしい。誰か内装工事屋の住所を知らないか？

KV 一人知ってますよ。そいつはテレビジョン・ヴィーゼとカウフィンガ
ー街の角に住んでいます。

楽長 それじゃ、そこへ行ってくれたまえ。わしからだと言って、うちの幕
が引つかかってしまったので、お時間があったら、ついでのおりに来て、見て
くれって頼むんだ。

(劇場支配人は去る。楽長の手振りに従って、二人の楽団員が幕の中央にわず
かのすき間を引っぱってこしらえる。そのすき間から女性歌手の姿が見える)

楽長 歌手はもうそこにいたんだな、ちつとも気づかなかったわい。

歌手 歌曲『なくした幸せ』

KV 何がなくなっただんです？

楽長 幸せをなくしたんだ。

KV 遺失物の広告を出して探せばいいのに。

歌手 (歌う)

春が開いた窓から僕たちに

日曜の朝、笑いかける度に、

林と緑の野をいつしよに歩いたね。

愛しい人、君はそれを覚えてるか？

(KVはこの歌にまったく不似合いな節をヴァイオリンで弾く。楽長はそれを
罵る。KVはそれにヴァイオリンで調子を合わせる。楽長はまた罵る。歌手は
どンドン歌い続ける)

日暮れに家路につくときには

君のかわいい手は僕の腕の中、

柳のざわめきが君を驚かせる度に

僕は君をしつかりと抱きしめた、心を熱くして。

(劇場支配人と内装工事人がしごと工具を持って、観客席を抜けて舞台まで
ドタドタやって来る。歌手は歌い続ける)

あの頃、僕はどんなに君を愛していたか、

君の足跡にだってキスしたかった、

君のためになら何だって捧げたろう、

それなのに、君は、君はもう僕を愛していない。

(この間に工事人は修理を始める。劇場支配人があれこれ指示する。二人のぶつぶつという声が聞こえる。金槌やハンマーの大きな音が歌の邪魔になるが、歌手は気にせず歌い続ける)

何にも心を患わず、何もなくても満ち足りてた、

勇気と喜びに恵まれていたから、

寒い冬の日暮れには

心地よい炉辺でいっしょに体を暖めたね。

僕たちは愛の喜びと楽しさに夢中だった、

君の頭は僕の膝の上でやすらい、

僕を見つめる君の目は太陽、

火のパチパチという音は甘い調べだった。

あの頃、僕はどんなに君を愛していたか、

君の足跡にだってキスしたかった、

君のためになら何だって捧げたろう、

それなのに、君は、君はもう僕を愛していない。

(K Vは椅子の上が上がって、内装工事人の仕事ぶりを見物しようとする。それから ヴァイオリンを弾き続けながら 奥の舞台へ上がり、さらには工事人の後からはしごを上げる。怒った楽長もK Vの後から奥の舞台へ上がって行き、激しい身振りで、すぐに自分の席に戻るよう指示する。K Vは気にとめず、楽長をよける。その際にヴァイオリンの弓が歌手の髪の間刺さって抜けなくなり、思わず知らず すっかり工事人の方に気を取られている 歌手のお下げのかつらを気づかずに釣り上げてしまう。その間もK Vは絶え間なく機械的に弾き続ける。この間に内装工事人は修理を終え、幕を何度も開閉して様子を見、それから大きな音を立てて工具をまとめる。そして舞台を去る。楽長が再びK Vのそばへ寄って行き、K Vを奥の舞台から引っ張り下ろそうとする。K Vはまたも逃れ、その時にプロンプターの手を踏んだまま立ち止まる。

プロンプター・ボックスから悲鳴が上がる（痛い、痛い、痛い！）

楽長 わめいてるのは誰だ？（プロンプターに気づく）君、プロンプターの手の上に乗ってるぞ、下りなさい。（KVはひどく驚いて、足を上げ、プロンプターを見つめる）自分の席に戻りたまえ。プロンプターの手を踏みつけるなんて、わしには訳がわからん。君は気がつかなかったのかね？

KV いや、全然。 気づいたのは向こうでしょう。（プロンプターはヒーヒー言い続ける）あんなにわめいていいんですか？

楽長 当然だよ、君が指の上に乗ったんだから。そんなことをされて気持ちがいいと思うのかね？ 一度、自分の指を踏みつけてみたら、君にもよくわかるだろう。礼儀をわきまえてるなら、謝りたまえ。

KV わきまえてません。（プロンプターはまだ叫んでいる）あいつが叫んでるほど長くは乗ってませんでしたよ。

楽長（手前の舞台に下りてくる） それにしても、あの歌手はうまいね、皆さん。

KV（同様に下りてくる） いでえを持ってますね。

楽長 偉大を持つとは言わんよ。あの歌手は偉大だと言うのだ。

KV いや、私は、ひでえ声の持ち主だって言いたかったんです。

楽長 そんなことはまったくないぞ。それはそうと、ちやうど思い出したことがある。いいか、君、今度、通りで会ったら、ちゃんと挨拶してくれよな。それが礼儀じゃないかね。

最後の楽団員 こいつとどこかで会ったんですか？

KV きのうち郵便局でな。楽長が列に並んでたんだ。

楽長 ほら、君はわしを見かけたんだ。どうして挨拶してくれないのかね？
KV だって、あなたはずっと後ろの方にいたでしょ あんな後ろの方へ挨拶できませんや。大勢の人が、人間、観客、通行人、民衆、みんなごちゃごちゃにいたんですよ。あの人、あなたの前に並んでいたご婦人、財布を盗まれましたね。

楽長 何が言いたいのかね？ ええっ？ まるでわしがそのご婦人から財布を盗んだみたいな言いようじゃないか。

KV 確かなことは私は知りませんけど。

楽長 まだ言い張る気だな。口を慎みたまえ。誰かご婦人が財布を盗まれたってことはあり得るだろう。巾着切りの仕業だ。

KV もちろん倉庫破りではない。

楽長 そのご婦人は財布にもつと気をつけてれば良かったのだ。そうすれば盗まれなかつたらう。

KV そんなこと言っただってもう遅すぎます、もう盗まれてしまったんだから。

楽長 むろん後からじゃ意味はない、事前に気をつけるべきだったのだ。

KV でも盗まれるなんて事前に知りませんよ。

楽長 気をつけていたのなら、盗まれなかつたのだ。もし常に財布に目をやっていたらな。

KV いつも財布に気をつけてるなんて不可能ですよ。

楽長 ああ、もうやめてくれ。その婦人がわしに何の関係があるんだね。財布に気をつけてられないほど馬鹿なら、家において、郵便局なんかへ行かなければいいのだ。

KV そうしたら切手を買えませんかよ。

楽長 あのな、わしはな、一般的なことを言っってるんだ。人混みの中では、何もなくさないように持ち物に気をつけなくてはならんのだ。

KV そうですね。私にもオクトーバーフェストの時、そんなことがありました。その時は、人混みのどまん中にいたんです、七の字コースターのすぐわきの所に。

楽長 七の字コースターで何だね？ コースターは八の字に決まってる。

KV 知ってますよ。でもまだ完成してなかったから。とにかく、その時のことなんです。私は切符売り場の所で人混みに巻き込まれてしまって、そこで、もう少しで私のすばらしい金時計を盗られるところだったんです。バネで開くふたのついたすばらしい時計をね。

楽長 おやおや、そりゃあ、肝を冷やしたろうね。

KV そんな日には私が時計を家に置いてくることくらい、あなたにもわかりそうなものだな。

楽長 もうおしゃべりはやめたまえ、うんざりだ。八調のファンファーレ！

(ファンファーレが聞こえ、奥の舞台の幕が開く。楽長は奥の舞台へ上がる) 聴衆の皆様。皆様にここで世界的に有名な自転車曲乗り師、ミスター・ハンプトンクヴェンプフトンをご紹介申し上げます。(自転車曲乗り師が舞台に現れる) こちらは一九**年に生まれ、シカゴの小学校を卒業後、当地の道路建設局でタール注入工として二年間働いたのち、曲芸の道に入りました。すでに北西インド、アルゴイのグライゼンタール、シュツットガルト、ケンプ

テン、ベルリン、イースター、フフィングステン 聖霊降臨祭、メラーン等々、各地で客演してお

ります。当地の観客の皆様にもきつと気に入っていただけでしょう。ミス

ター・ハンプトンクヴェンプフトンは演し物を五部構成にしております。すなわち、その第一は、フリーホイールおよびコースターブレーキのない特殊三輪車での輪乗り。第二は、走行中にろうそくの炎を吹き消します。第三は、鈴の音をたてての輪乗り。第四は、目隠しをして舞台の上で輪乗りをいたします。

そしておしまい、夜と霧を抜けての身の凍るような死の走行であります。(楽団はファンファーレを演奏する) それでは第一の演目、フリーホイールおよびコースターブレーキのない特殊三輪車での輪乗り!(それに合わせて「ドナウ河のさざ波」が演奏される)

KV うまいぞ、うまいぞ、うまいな うますぎるよ 光ってるな、日が射せば。

楽長 第二の演目、走行中にろうそくの炎を吹き消します。(ろうそくに火をつける)

(自転車曲乗り師は一度目は通りすぎてしまつ。楽長がろうそくを高くかかげすぎたので吹き消せなかったのだ。曲乗り師はもう一度、輪乗りをする。楽長はろうそくを間近に差し出し、曲乗り師はそれを吹き消す。楽団はファンファーレを始める)

楽団員二 あの自転車乗りがギヤラをいくらもらつか、知ってるかい?

KV 百マルクさ。

楽団員二 日に??

KV とんでもない。年にさ。

楽団員二 そんなに多くないんだな。

KV やりくりしなきゃならんぞ、きつと。

楽長 第三の演目、鈴の音をたてて舞台の上で輪乗りいたします。(曲乗り師の手に鈴を渡す。曲乗り師は鈴の音をさせながら走行する。楽団はファンファンを演奏する)

KV あの自転車乗り、いくつだろつな。

楽団員三 二十つてとこだろつ。

KV 自転車こみでか？

楽団員三 まさか。自転車の方がずっと古いぞ。

楽長 第四の演目は目隠しをしての走行です。(曲乗り師に目隠しをするがその布の幅がとても狭いので、すき間から見る事ができる)

KV あいつ、のぞいてるぞ。

楽長 彼は何も見えません。(曲乗り師に)それとも何か見えるかね？

曲乗り師 いいえ。

楽長 ほら、本人が何も見ええないと言っております。(曲乗り師は自転車を走らせ、わざと壁にぶつかり、自転車ごと倒れる)

KV および全楽団員(椅子の上上がり、叫ぶ) ほら、転んだぞ！(その間も演奏はふつうに続ける)

楽長 そんな大声、出しなさんな。転んだのを誰も気づいてないみたいな。

KV(椅子の上に立ち、演奏を続けながら) 自転車がどうかあったかな。

楽長 自転車なんてたいしたことではない。肝心なのは、あの男がどうもなっていないかってことだ。(曲乗り師に)それとも君、どこか痛いかね？

曲乗り師 いいえ、とんでもない。

KV(椅子の上に立ち、演奏を続けながら) えっ？ 飲んでない？

楽長 いや、とんでもない、と言ったのだ。

KV てんでない？

楽長 いや、とんでない、だ。あれ、わしまでつられちゃった。(楽団員たちが椅子の上に立っているのに気づく)下りたまえ 皆、椅子の上に乗ってたんだな 下りるんだ！

(全員、椅子の上に乗ったまま演奏を続ける)

KV あの男、きつと転ぶぞ。あんたが目隠しをしたから、何も見えないん

だもの。

楽長　そこが芸なんじゃよ。

K V　目隠しが？

楽長　いいや。目隠しして自転車で走るっていうのがだよ。

K V　それじゃあ、あの男は何も見えないんですね。

楽長　見えてはならんのだ。

K V　それじゃあ、転ぶでしように。

楽長　転んではならんのだ。

K V　でも転びますよ。

楽長　どうしてだね。

K V　目隠しをされているから。

楽長　そこが芸なんじゃよ。

K V　えっ？　目隠しが？

楽長　もうやめたまえ、堂々めぐりじゃないか。

K V　これはまったく危険な演し物だな　死の演し物だ　だって、これじゃ殴り殺されそうになったって気がつかないもの。

楽長（いまだ椅子の上に立ったまま演奏している楽団員たちに）　いい加減に下りたらどうなんだね。（楽団員たちは椅子から下り、演奏を終わらせる）

K V（下りながら）　でも、あの男がまた転んだら？

楽長　そうしたら君はそこにまた上がっていいぞ。（観客に）おしまいの第五の演目、夜と霧を抜けての身の凍るような死の走行です！「夜と霧を抜けて」と大書された白い紙を張った輪を持ってくる。太鼓の連打が始まり、その頂点で曲乗り師は、その紙を突き抜けて走る。楽団はファンファーレを何度も何度も繰り返す。劇場支配人がしおれた古い月桂冠を持ってきて、曲乗り師の首にかける。曲乗り師はお辞儀をして退場する。奥の舞台の幕が閉まる。楽団員たちはいつまでもファンファーレを繰り返している）

楽長　いつまでやってるんだ。

K V　あの男、それにしてもだいたいぶ稼いだでしょうね。

楽長　うむ、あの曲乗り師はうまいな。わしは、あの男には将来性があると期待してるよ。

KV 二十年、三十年後には、いよいよよくなるんでしょうね。こういう事って、学ばずにはいけません。天性のものなんです。こういう芸人には血の中に、芸人の血の中には、家族の中には、家族の血の中には、芸人家族の血の中にはそれが流れてるんですよ。芸人的な家族の血の中には。

楽長 そうだ、それが芸術家の才能ってものだ。こういう人たちにはそれがあのだ。あの男の父親は……

KV 絶対……

楽長 何が絶対なのかね？ 君はわしが言おうとしたことを知らなくせに。わしが言おうとしたのは、あの男の父親は……

KV ええ、それを私は言いたかつたんです。

楽長 おい、こいつはわしに話をさせないんだな。あの男の父親は絶対にたいた芸人が競輪選手だったかだ。

KV あるいは赤いライターへ訳注 「自転車乗り」と「レモネードで薄めたビール」の二つの意味ありだったか。

楽長 見かけほど簡単なものじゃないんだ ああいう曲芸はつねに危険と隣り合わせなんだ。 君も、あの男がもう少しで転倒するところを見ただろう。あれはまったく死の演し物だとわしは言いたいね。

KV その通りですよ。何てつたつて、観客に殴り殺されそうになってもまるでわからないんだから。

楽長 話題を変えようじゃないか。さて、新曲をやるぞ。わしがきのう編曲したやつだ。楽譜を早く開きたまえ。

KV どの楽譜です？ ホフマン気付け薬 ホフマン物語、これ、一度もやったことないですよ。練習なしでは演奏できません。

楽長 練習なしでやるのだ！ あなた方はプロの楽士であられるんだろう
初見で演奏するのだ！

KV でも楽譜に間違いがあつたら？

楽長 間違いはない、心配せんでいい。その楽譜はわしが自分で書いたのだから。

KV だから不安になつたんです。

楽長 君、失礼じゃないか。

KV まあ、私たちはどっちでもいいんですよ。書かれている通りにきちんと演奏いたします。

楽長 よろしい、書かれている以上にも以下にも演奏せんでいいぞ。

KV はい。以上ってことは絶対ありません。

楽長（指揮棒で譜面台をたたく。楽団員は反復記号までの同じ四小節をずっと繰り返す。楽長は怒って指揮棒で譜面台をたたき、どなる）おいおい、何をだらだらやっとするのだ。どうして先へ進まない？

楽団員全員 進めません。四小節目に反復記号がついてるんです。

KV 千年間だって反復しますよ。

楽長（KVの手から楽譜をひったくる）どこに反復記号があるのかね？

KV そこ！（ヴァイオリンの弓で楽譜の上を指す）

楽長 君のその不快な弓をどけてくれたまえ。自分で探すから。

KV そこですよ！（もう一度、弓で指す）

楽長 示してくれんでよろしい！（指揮棒でKVの弓を払う。KVは指揮棒を打ち返す。次第にフェンシングの構えになる。楽長は強い一撃を受けて後ずさり、それからまた前に出てKVに向かってどなる）もう一度来い！（KVは言われた通り、再度楽長の腹めがけて突く。それから彼は規則通りに「サーベル」（ヴァイオリンの弓）を持って礼をし、あたかもサーベルの鞘を持ってるかのように左腕をわずかに曲げて、ヴァイオリンの弓を左手の親指と人差指で作った輪の中に優雅に納める）

楽長 あんまりじゃないのかね。恥を知れ！

KV 私たち、譜面にある通りに演奏するって言ったでしょう。

楽長 こんな醜態を観客にさらして。お客さん方が何て考えるとと思うんだ。

KV 私は何とも思いませんがね。

楽長 君にこれっぽっちもやる気がないのは悲しむべきことだ。

KV 他のみんなも同じですよ。

楽長 君らには誰も何も言わんさ、責任を取るのはわしなんだ。

KV 誰もそれに気づきませんよ。

楽長 君は客が何も聞いちゃいないとも思ってるのかね。

KV とんでもない。

楽長 じゃあ始めよう。『トルコの番兵』(出囃子が始まる。数小節の後、奥の舞台の幕が開く)

奇術師(ゆっくりと舞台上に登場。 音楽やむ おもむろに話し出す) こ
んばんは、観客の皆様。こんばんは。自己紹介させて下さい。私、オリエント
の奇術師である。皆様にさまざまなマジックをお目につけよ。
皆様ご存じのように奇術は魔術ではない、単に手先のスピードよ。私の手に皆
様が注目なさっている時、口で皆様をだますよ。私の口に注目されている時、
手で皆様をあざむくよ。 さっそく手品を始めて、最初のドリンク、いやト
リックをお目につけよ。なかなか良いトランプ手品だよ。ここに一組のトラン
プがある。普通のトランプだつてこと、よくご覧されよ。ほら。(トランプを
観客に見せる)どなたかお一人、カードを一枚引いて下さるかな。(一枚引かせ
る)はい そのカードをよくご覧になって覚えて下さい。 そのカードを
観客席に見せて下さい。そのカードをまたこの中に戻して下さい。 ありが
とう。 カードを切つてしまおう。(カードを切る)あなたの選んだカードは
この中に入っているとお願いですな ちがうのだ あなたのカードはとっ
くに消えて、私の上着の内ポケットの中だよ。ほら！(上着からカードを取り
出す。最初からポケットの中に入れてあったものである。それを表を裏にして
観客に見せる。もちろん、別のカードである)ありがとう。

KV あのう、人から聞かれたんだけど、あなたは歳の市のトルコ蜂蜜ハ訳
注 蜂蜜・砂糖・ゼラチン・アーモンドなどで作った菓子屋さんなんですか？

奇術師 蜂蜜屋だつて?! まさか! あれは妹だ。(観客に)すばらしい
奇術の二つ目のドリンク、いやトリックだよ。 ここに一本の赤いバラがあ
る。この赤いバラが別のバラに変わる 別の色に、白いバラに、ピンクのバ
ラに、緑のバラに、どんな色にも! さあ、皆さん、どの色に変えようか?

KV 茶色いバラ!
奇術師 茶色いバラなんてないよ。

KV でも白いバラが何か茶色い塊 油絵の具とかの上に落ちたら?
奇術師 どの色にしようか?(いろいろな声上がる。最後に)「ピンクのバラ」
という声(それではピンクのバラに変えよう。このバラを左手に持つ。そして
右手では二本のユツピサッキ サキユビ サッキユビ 指先でこのハン

カチをつまむ。ハンカチには種も仕掛けもないよ。これを赤いバラの上にかける。そら、一、二、三。(ハンカチといっしょに赤のサックをはずす)はい、赤いバラがピンクのバラになったね。　　ありがと。(お辞儀をすると、ハンカチから赤のサックが落ちる)

KV　あの、何か落ちましたよ。

奇術師　静かに、人に知られないように。

KV　顔のバラゲシツヒツローゼの訳注　顔面丹毒のことでも同じことができますか？

奇術師　さて、皆様、今から、史上最高のマンジユウ、いやマジックをお見せいたすよ。ここにシルクハットがあるね　普通のシルクハットよ　二重底でない　何も入ってない、空っぽよ。このシルクハットをこの手品机の上に置いて、ありとあらゆる物をここから取り出してご覧に入れるよ。　奇術棒で、ほれ、一、二、三。(帽子の中へ手を入れる。帽子の底には大きな穴があけてあり、机の下に座っている少年が鉢植えの花を手渡す)　あ、空っぽの帽子の中から鉢植えが出てきたよ。　そら、一、二、三。もっと大きな物だって魔法で取り出してみせるよ。　何を出そうか？

KV　洋服ダンス。

奇術師　洋服ダンスは少々大きすぎる。

KV　ビールを一杯。

奇術師　ビール、いいね。ビールなら出せるよ。のどがカラカラだね。

それ、一、二、三。(また帽子の中に手を入れる)　一杯のビール。乾杯、皆さん。　乾杯！(その間に机の下の少年が帽子を通して手を伸ばす。その手が帽子の上に見える)

KV(奇術師に手振りですれを知らせる)　あの、見て下さい、何かまだ出てきますよ。

奇術師(びっくりして机に駆け寄る。帽子の中へどなりつける)　この馬鹿、トンチキ奴。もっと何か出させて私が言ったかね？(少年は机の中から外をのぞき、這い出す。二人は追いかけてこをする。奇術師は罵り、少年は舌を突き出し、退場する)待つんだ、この悪ガキ、クソガキ！

KV　悪ガキ、クソガキだって？　トルコ語じゃないな。

(奥の舞台の幕が閉まる)

楽長(指揮棒で譜面台をたたく) さあ、スープレットの番だ。楽譜を開きなさい。

(KVはトロンボーンを持つ。楽長は指揮棒を振り上げ、行進曲が始まる。だが最初の音しか聞こえない)

KV(叫ぶ) 待ってくれ、水を抜かなきゃなりません。

楽長 チツチツチツチツ。(KVは事前にコップ半杯の水を入れてあったトロンボーンから水を抜く)おい、さっさとしないか。

KV そう簡単にはいきませんよ。二つの管をいちどきに二つの穴に入れなければならぬんですから。(やってみる)片方だけうまくはまったって、まるでしようがないんです。それなら、両方ともはまらない方がましなくらいなんです。

楽長 いつまでも眺めてる訳にはいかんよ。

KV なら見ないで下さい。金管楽器はいつも水を出さなければならぬなんて本当に馬鹿らしいですね。ヴァイオリンなら、こんなことはない。ヴァイオリン弾きがヴァイオリンを分解するなんて見たこともないでしょう。あれは水がたまりませんからね。屋外でヴァイオリンを弾く人もいますけどね、そういう人もいるけれど、外で演奏するなら金管楽器ですよ。弦楽をやってる行列なんて見たことないでしょう。だって、弓で人の帽子を突き落とさないようにするにはお互い三メートルは離れて歩かなければなりませんからね。それにコントラバスにいたっちゃひどいことになりますよ。コントラバスを行進しながら弾かなきゃならないとしたら、コントラバスは立ち止まらなければ弾けないんだから、歩きながらじゃ弾けないんだから。コントラバスの下に車をつければ、一応動きはするけれど、下水のふたに引っかかったら止まってしまふ。もしたら行列全体が進まない、コントラバスの後ろの全員が止まらなければなりませんからね。

楽長 我慢ならん。誰に向かってそんなくだらん話をしておるのだね? 誰も聞いてやらんぞ。

KV お客様方は聞いておられますよ。今まで吹奏楽と弦楽とのちがいをこ存じなかつたんだから。一度説明を受ける必要があつたのです。お客様方は説

明を渴望してらしたんですよ。(しばらく間をとってから)そしてこれがうまくはまれば

楽長 わしが手伝ってやろう。

KV 二人じゃうまくいかないんです。(また、はめ込もうと試み、突然、言う)これは冬の窓の取り付けとまったく同様ですな。上がうまくはまったと思つと、下がまたはずれてしまう。

楽長 君抜きで始めるからな。

(序曲が始まる。奥の舞台の幕が開く)

スープレット(登場し、歌う)

おやまあ、これはこれとはホール中が大騒ぎ、

大きな歓声が建物中に響きます、

みんなが叫ぶわ、あの子は本当に大したものだ、

あのかわいい子は、こつがわかつてるなって。

私の体には芝居の血が流れてるの、

鼓動はどんどん早くなる、

いつも明るくさわやか、自由な気持ちにあふれてる、

そして歌と冗談に夢中なの。

みんなが叫ぶ、がんばれフレーフレー、

小粋なミツツイ、ここにあり。

歓声が建物中に響きます、

みんなが拍手してくれます。

みんなが叫ぶ、がんばれフレーフレー、

小粋なミツツイ、ここにあり。

歓声が建物中に響きます、

みんなが拍手してくれます。

スープレット(リフレインの間、舞台の上を行進する。楽団は間奏曲を演奏し始める) **スープレット**は歌い出す) 私の愛……(彼女は二番の最初の言葉を歌つただけでつつかえてしまう)

楽長 先を歌いなさい。

スープレット できないんです。

楽長（指揮棒で譜面台をたたく。音楽がやむ。ただしKV一人はトロンボーンで二番の終わりまで吹き続け、それからひどくいぶかしげに楽長を見つめる）君はわしらがとづくに演奏をやめたのに全然気づかなかったのかね？

KV 曲のしまいまで吹かねばならんでしよう？

楽長 これだからな。君はぼんやりと吹いてるんだな。まったく気が散ってるんだから。

KV どうして？ どうかしたんですか？

楽長 どうかしたかだつて？ スープレットが立ち往生したんだ。歌詞がわからなくなつたのだ。お嬢さん、どうしたつていのですか？ 何で歌詞を覚えてこないんです。

スープレット 暗記はしたんです。

楽長 そうでしょうね、なら、忘れたつて訳だね。

スープレット 誰にでもあることですよ。

楽長 わしにものを言うときには口を慎みたまえ。まったく、何にもできないくせに図々しいのがきょうびじゃ幅をきかせてるんだ。

KV この子の靴のひどいことつたら。

スープレット やめて、これは私の舞台用の靴なのよ。

KV 普段用の靴つてのを見てみたいものだ。

楽長 お嬢さん、それに君の衣装は何なんだね。後ろにも前にもぼろがぶら下がってるぞ。そんな格好で舞台に出るものじゃないよ。

スープレット 私の衣装がお気に召さないのなら、どうぞ新しいのを買って下さいな。

楽長 わしはそんなこと絶対せんからな。わしより馬鹿な奴を探すんだな。

KV もっと馬鹿な奴をですかい？ この子、見覚えがあるな。

スープレット 私をご存じのはずないと思いますけど。

KV きつとあの子だ。先週この子のとこでバナナを買いました。

スープレット 失礼ね、私はあなたなんてちつとも知りません。（考える）ああ、思いだしたわ、私たちあそこで ええと何ていったかしら シュターデルハイムハ原註 ミュンヘン刑務所の所在地ででお知り合いだったわね。あそこじゃ、よく、お庭でお会いしたわね。

楽長 本当かね、君たちはシュターデルハイムにいたのかね？

KV 私は看守でしたが、この人は入れられてました。

スープレット 楽長さん、お宅の楽士が私を侮辱したら承知しないわよ。

楽長 ここにいる者たちは楽士ではないのだよ、皆さん、音響芸術家なのだ。

スープレット そして私は一流のスープレット。

KV そうとも、見ればわかる。

スープレット 楽長さん、私とても上がってしまって、二番がもう思い出せないの。出だしをご存じないですか？

楽長 わしは歌詞には興味がないからな。

KV 歌詞は楽器でできませんな。

スープレット 何か別なのを歌ってもいいかしら？

楽長 他に何かできるのかね？

スープレット もちろん。例えばすぐ次のとか。私の歌集の第二番。

楽長 君ができるのは二曲だけだろう。それにこれは歌集じゃない、ただの紙つぺらだ。さあ、皆さん、第二番だ。でも、またつかえたら、今度は放り出すぞ。

(前奏が始まる)

スープレット(歌う)

私、すてきな人を知っている、

忘れることができないわ、

でも向こうは、何てこと、

私の気持ち、知らないの。

でも私、黙っていられない

だから、聞いて下さいね。

あの人はここにいろの

私は夢中なのよ。

ああ、やさしくて、誠実で、勇敢な愛しいあなた、

私にこんな愛の苦しみを味わわせて。

愛を、誠を、そしてキスを下さい、

さもないとあこがれて死んでしまうわ。

(スープレットはそう歌いつつ楽長に抱きつく)

楽長夫人(ホールに入ってきて叫ぶ)　これでとうとうお前さんのしっぽをつかんだよ、聖人面のまぬけのあんた。うちじゃ能なしのふりをして、ここじゃスープレットといちゃついているんだね。

楽長　観客席、お静かに！　何の騒ぎかね？

KV　奥様がお見えます。　こんばんは、楽長夫人。

楽長　何、女房が？　確かに。

スープレット　あれ、楽長さん、奥様がいらつしやるの？

楽長　いや、下宿のおかみさ

楽長夫人　下宿のおかみにだつてなつてやるさ。

スープレット　結婚してたなんてちつとも知らなかったわ。きのう、グリユンバルトに連れて行って下さったとき、独身だつておっしゃったじゃないの。

楽長夫人　お前さん、きのうはグリユンバルトに行つてたのかい。私にはリハーサルだと言つといて。

楽長　そうとも、リハーサルをしたのさ。店の亭主が控えの間にピアノを置いていて、わしはそこでこの娘さんに練習をつけてやったのだよ、そうでしたな、お嬢さん？

スープレット　もちろんリハーサルをしていたいたんです　やれやれだわ。

楽長夫人　おだまり、図々しい女ね。こんな年寄りの結婚してる男といちゃついたりして恥ずかしくないの？　もっと別のを探せないのかい、このおちゃっぴい。

スープレット　ちょっと、私を侮辱したら承知しないわよ、偉い人たちのところに行つて言いつけてやるから、このばばあ。

楽長夫人　いったい、何を考へてるのかね。自分の格好をご覧よ、厚化粧のおちゃっぴいのくせに。あんた、そこに行つてあんたを引きずり下ろしてやるよ。　それからお前さん　老いぼれのトーヘンボク　ちょっとこつちに

来るんだ、話があるから。みんなの前じゃ言えない話だよ、ほらすぐに。

KV　気を落ち着けて下さいよ、ロールヌーデルの奥さん、でしたよね。

楽長夫人　あたしゃ、あんたと話してるんじゃないよ、腹ペコ楽士。

KV ちょっと、何て言い方をするんですか。

楽長夫人 口出ししないでおくれよ、あたしや亭主と話してるんだ。さあ、お前さん、早くこっちに来るんだよ。

楽長 わかった。すぐ行きますよ。あいつ何で来たのかな、わしにはわからん。でも君がいけないんだぞ。君が別の歌を歌ってたなら騒ぎは起こらなかったのだ。

楽長夫人 ほら、さつさと！（出口の扉の所から中へ向かってどなる）

楽長 今、行くよ。どう思う、君たち。わしは行くべきかね？

KV それはお勧めできませんな。

楽長夫人 長くは待たないよ。

楽長 今、行きますよ。わしは行って来るよ。あんな、君たち、恐縮だがちょっとだけついて来てもらえないだろうか、な、どうだろう？

KV 俺たちは関係ありません。

楽長夫人 もう我慢できない。いつまでも私が待つてると思ってるのかい？ こっちから行くよ。さつさと来るんだ。

楽長 今、行くから、外で待つててくれよ、すぐ行くさ。わし、行って来るから。あいつ、わしが恐がっているとでも思ってるんだろう。あいつにわしの考えを言つてやるぞ。さあ、どうした、わしに何の用なんだ、ほら来たぞ。

（出て行く。大声、口論、びんたの音）

KV やっぱりな

楽長（泣きながら戻ってくる。頬をハンカチで押さえているが、勝ち誇ったように楽団員に言う） あいつに二、三発お見舞いしてやったよ。

KV でも逆だったようなお顔ですね。

楽長 ほっといてくれないか。さあ、歌だ。

（音楽が始まる）

スープレット（歌う）

ああ、やさしくて、誠実で、勇敢な愛しいあなた、
私にこんな愛の苦しみを味わわせて。

愛を、誠を、そしてキスを下さい、

さもないとあこがれて死んでしまっわ。

(スープレットは退場。奥の舞台の幕が閉じる)

楽長(自分の歯をさわって調べてみると、ぐらついている。腹を立てて)　これ以上満足できる演奏はないね、諸君。君たちとなら、やるうと思ったことがみなできる。

K V　やれやれ、八つ当りが始まったぞ。

楽長　誰もわしに注意したらん、誰もこつちを見てない。いったい何のためにわしはここにいるのかね？

K V　私たちもよくそれを考えるんですよ。

楽長　ある行進曲が流行遅れになったって、それはたいしたことじゃない。古臭くなつた楽譜にあれを足せばいいのだ。あれを加えるのだ。あの、何と言つたか、あれを入れる必要があるのだ。　リズムを加えるのだ。それが肝心なんじゃよ。君たちにはそれが欠けとるのだ。

K V　そんな奴、知りませんね。そんなのいたことありませんよ。

楽長　わしはリズムのことを言つとるんだぞ。

K V　お前、リズムつて奴、知ってるか、アンデルル？　いや、こいつも知りませんよ。奴の兄弟なら知ってますがね。

楽長　そりゃ結構。リズムの兄弟を知つとるとはな。それはいったいどんな奴なんだね、わしも知り合いになりたいものだよ。

K V　とがったあご髭をはやした、こんなチビデブです。

楽長　リズムがかね？

K V　いや、ライスベルガーつて名前でした　今、思い出しました。

楽長　君はまた恥をさらしたな。こんな簡単な音楽用語も君は知らないんだな。音楽学校に行かなかつたからかね。田楽学校にでも行つたんだらう。

K V　あそこでもフーフー吹かなければなりませんでした。　あのう、ネクタイがずり落ちてますけど

楽長　どのネクタイがずり落ちてるんだね？

K V　あなたの。

楽長　あの中の？

K V　あなたの　外側の　そこ。

楽長　そう、外側だな　あの中つて言つたぞ、この馬鹿　知つとるよ。

きょうはもう何度もずり落ちとるんだ。カラーボタンが取れちまったもんでな。それで全体のからくりがいかれて、ここも開きっぱなしなのだ。

KV 朝、取れたんですか？

楽長 何を言うのかね カラーボタンが一つありさえすれば、すぐに、ちゃんとなるんだがな 君たちのうちで誰かカラーボタンを持つとらんかね？ ちよつと探してみてくれないか？

(楽団員全員、探す)

KV ゼットルマイアーがいつも一個持ってますよ。

楽長 ゼットルマイアー君、頼むよ 彼はどこにいるのかね。

KV きょうは来てません。

楽長 それじゃ、しょうがない。

KV でも、あの男、持つてるんですよ。

楽長 でも、ここにいないんじゃない、わしの役にはたたんよ。

KV 私も一個あります。それで間に合いますか？

楽長 君が持つてるって？ なら、貸してくれたまえ。後で返すから。

KV 返して下さるんですね でも、これを取ると、私のカラーがずり落ちてしまふ。

楽長 誰も君にそこまでしてくれとは頼んどらんよ。予備のボタンを持ってないかって、わしは思ったのだ。

KV とんでもない

楽長 まあ、いい。こうすればうまくまとっている。

KV もう落ちましたよ。

楽長 わかっとる。もうやめてくれ。このために首を縛り付ける訳にもいかんだろ。

KV どうして、だめなんです？ 為せば成る、って言うじゃないですか。

楽長 ほら、君の楽譜だ。(その楽譜を譜面台に縦横逆に置く)

KV それじゃあ、奴さんが指揮する通りに吹いてみようぜ。面白そうだ。

(椅子の上に斜めに寝そべる)

楽長 (指揮棒で譜面台をたたく 行進曲『ウィーンは変わらず』が演奏される。中断させる) なんて格好をしとるんだね 他の人たちのようにきち

んと座りたまえ！

KV でも、あなたが私の楽譜をこんな風に置いたんですよ。

楽長（行進曲を再び始める。KVは口笛を吹く） どうしてさえぎったりな
どするのかね 何を思いついたんだ？

KV シーツ シーツ

楽長 いったい何かね？

KV ちょっと静かにして下さい。（聞き耳を立てる）何だ、気のせいだった。

楽長 もう何てことだ！（再び行進曲を始める。KVが口笛を吹いて、また
中断させる）いったい何かね？

KV やっぱり空耳じゃなかったんですよ 私のズボン吊りが切れたんで
す。

楽長 ぼろのズボン吊りのために二度も演奏を中断させるなんて 何てひ
どい話なんだ。

（音楽が再び始まる 最初のところで太鼓が遅れて打たれる）

KV こんなへまって聞いたことがない。

楽長 君には関係ないことだ。自分がへまをやらんように注意したまえ。君
だって間違うかもしれんぞ。

KV あなたもですよ でもあなたが間違えても、誰にも聞こえませんか。
あんな馬鹿な間違いつて聞いたことがない。

（曲の演奏が続く。次の休止の時にKVはトランペットを口にあてたまま何か
言う）

楽長 何を言つとるのかね わしにはよくわからんのだが。（KVはつぶや
く）それを口からはずすのだよ。

KV あなたのネクタイ、またずり落ちてますよ。

楽長 どうでもよろしい。（指揮を続ける）

KV（叫ぶ） いてーっ！

楽長 また、いったい何なんだね？

KV マウスピースにぶつけたんです。あなたがあんまり急に音を切らせる
ものだから。

楽長 注意したまえ。（曲の終わりまで指揮を続ける。奥の舞台の幕が開く）

楽長（奥の舞台へ上がる） 皆さん！ 皆さんはあの有名な断食芸人スッチ
へ原註 ジャコモ・スッチ、世紀転換期のイタリアの有名な断食芸人々をまだ
覚えていらつしやるでしょう。彼は、多大な財産を持っていたのに、つまり空
腹になる必要はなかったのに、学問に奉仕するために断食の公演を続けました。
国外国内のほとんどすべての大都市の演芸場でガラスケースの中に四十日間、
何も食物を取らずに籠りました。その断食芸人スッチに今や新人の断食芸人バ
プティスト・プリヴェントランスという大変な競争相手が出現しました。ここ
らは、スッチ氏の断食記録をはるかに更新する力をお持ちです。四十日間では
なく四十一日間の断食期間を断行いたします。プリヴェントランスさんにお話
をうかがってみましょう。皆様もきつとご興味をお持ちでしょう。 プリヴ
ェントランスさん、どうしてこのような風変りな職業をお選びになったのです
か？

プリヴェントランス 私の両親は大金持ちですが、いつもそんなに豪華絢爛
な生活をしていた訳でもありません。でも、その一人息子である私、バプティ
ストを芸人、それも断食芸人にするためにはどんな犠牲もいといませんでした。
楽長 最初からかなり長い期間の断食を始めたのか、お聞きしてよろしいで
しょうか？

プリヴェントランス いや、この職業におきましてもささやかに始めるもの
です。例えば両親が豚の焼き肉やじゃがいも団子をしこたまがつがつ食べてい
るときに、私はただ眺めていなければなりませんでした。それは私に食事を与
えなかつたのではなく、私の職業教育のためだったのです。

楽長 お年をお尋ねしてよろしいでしょうか、プリヴェントランスさん？
プリヴェントランス まだ年寄りではありませんが、若くもありません。だ
いたい中年です。

楽長 なるほど、中世のお生まれですね。 本日、私どもは、この寄席で
あなたがその独自の芸をご披露下さるといふ栄誉にあずかりました。というの
も、今までここに断食芸人の出演はなかったのです。お客様に新しいものを提
供できまして嬉しく存じます。

プリヴェントランス 音楽監督さん、あなたの、そしてお客様方のご期待に
応えて、私独自の芸を喜んでお目にかけますよ。

楽長 皆さん！ 皆さんはバプティスト・プリヴェントランス氏がどんなに易々と何も食べずに四十二日間を過ごしてしまつか、驚かれることでしょう。バプティスト・プリヴェントランス氏は鐘の音を合図に四十二日間の断食療法を始めます。バプティスト・プリヴェントランスさん、記録更新の自信はありますか？

プリヴェントランス まかせて下さい。

楽長（鐘の合図をする） 四十二日間断食療法の開始です。（腕時計を見る）四十二日後の午後十時、この店の同じ場所で、食物摂取が再開されます。

本日ここにお集まりの皆様は、またその驚くべき場面にもお立ち会いいただけますなら、まことに嬉しく存じます。断食芸人プリヴェントランスはこれで皆様にお別れを告げます。

プリヴェントランス さようなら。（観客に向かってお辞儀する。退場。奥の舞台の幕が閉まる）

楽長 さあ、おしまい序曲だ。『詩人と農夫』

KV それはきょうはできませんよ。太鼓たたきがないから。

楽長 いないのは見ればわかる。

KV おらんです。

楽長 いないのは、わしにだって見えとるよ。

KV いない人間をどうやって見るんです？

楽長 誰が見るんだね？

KV あなたですよ。

楽長 いや、わしは、いないのは見ればわかると言ったのだ。いない人間が見える訳じゃない。

KV はあ、私もそういつつもりで言ったんです。

楽長 そうかね それとも君には見えるのかね？

KV ええ？

楽長 あの男はきょうも来てない、休暇を取ってるんだな。代わりにきょうは君が太鼓をやりなさい。

KV できません。トランプットを持ってますもん。

楽長 置けばいいだろう。どこに置こうか、こいつ困ってるな。わしが

持っていようかね？

K V ええ、お願いします。

楽長 これくらい君にもわかりそうなもんだがね それでは駆け足！ 急いでティンパニを運んでくるのだ。

K V でも一人じゃ持てません。

楽長 手伝ってもらえばいい。誰か手伝ってくれる者を探したまえ。

K V アンデルル、手伝え。

楽長 まったく、口の利き方も知らんな。アンデルル、手を貸してやってくれ。

アンデルル（K Vのそばへ行く） 何なんだい？

K V あのたらいを運んでこいってのさ。

アンデルル いつ？

K V アンデルルが、いつ？って聞いてますけど。

楽長 今すぐだ。

K V お前こつちを持ちたいか？（二人は場所を入れ替わる）

アンデルル あつちの方が良かったみたいだ。その方がうまく持てそうだから、左利きだから。

K V お前、左利きなのか。何でも左でやるの？ 食事 酒 居眠り

咳？

（アンデルルはそのどれもに「そうだ」と答える）

楽長 二人で何をおしゃべりしてるんだ？

K V アンデルルが今、自分は左利きだって言ったんです。何でも左でやるんですって。

楽長 頭がどうかしてるんだろ。

K V やっぱり左側が？

楽長 その男がどんなろくでもない癖を持っていようが誰も興味ないね。

K V そんなことはありませんよ。私は今、こいつからそれを聞かされて、とっても驚いたんです。

楽長 そいつは実に興味深いね。

K V それじゃ、お前、あつちに行けよ。（二人は場所を入れ替わる）

楽長 そのグルグル踊りをいつまでやってるんだね。

KV アンデルルがあっち側を持ちたいって言うものですか。

楽長 どこを持つと同じだろう。ティンパニは丸いんだから。

KV でもあいつが、どうしても言うんです。

楽長 じゃあ、彼をあっち側にしなさい。

KV でも、あいつはあっちを持ちたいって言うんですよ。

楽長 そうだよ。君はこっち側に来るんだ。そして彼はあっちだ。さっさ

としろ。口ごたえはなしだぞ。

(二人はいやいやながらぐずぐずと場所を入れ替わる)

KV 誤解なさってますね。彼はあっちを持ちたがってるんですよ。

楽長 そこにいたじゃないか。それならどうして彼は今、あっちに移ったんだね？

KV あなたが行かせたんじゃないですか。

楽長 君が、彼はあっちを持ちたがってるって言ったのだよ。そして、あっちというのはわしからみれば向こう側だ。

KV そうか、あなたから見るとあっちがあっちなんだ。でもアンデルルから見ればこっちがあっちなんだ。奴がこっちへ立ってない限りは。だから逆になってしまったんだ。

楽長 あっちとかこっちとか、誰にもわからんよ。ちゃんとわかるドイツ語で話したまえ。

KV ごく簡単なことですよ。例えばですね

楽長 もういい。

(二人はティンパニをゆっくりと持ち上げる)

楽長 今度はどうしたんだ？

KV 手伝うって、おっしゃいましたよね。

楽長 こっちがすんだら、手伝ってやる。さっさとしろ、早く！

KV アンデルルは進む先が見えないんです。

楽長 目を開けるんだ、そうすれば見える。

KV 背中には目はないってませんよ。どんどん進め、アンデルル、どこかにぶつかったら俺が知らせるから。(ぶつかるとほら。(二人はわずかに戻る。K

Vは振り向いて言う（ここで下ろそうや　待て　お前、俺の靴に足をつっ
こんだぞ。（二人はティンパニを床に下ろす。それから小声で）さあ、終わった。

楽長　聞こえないぞ　大きな声で言いたまえ。

KV　終わりました。

楽長　アンデルル、すんだのかね？　自分の席に戻りなさい。　眠ってる
みたいな男だな。

KV　退屈な奴ですよ。

楽長　君がすばしこくて本当に良かったよ　さもなければこんなにいるい
る起きなかつたろうよ。ほら、早くティンパニの調子を合わせたまえ　待て、
何て音なんだ。

KV　身の毛がよだちますね。ソファをたたいてるみたいだ。

楽長　どうしてなんだ？

KV　ひよっとすると、シンバルが載ってるからでしょうか？

楽長　そうだ、当たり前だ。

（KVは調律し、次にばちに耳を当てる）

楽長（やはりばちに耳を当てさせられ、それから言う）　今度はいいようだ
な。ほら、君の楽譜だ。よく数を数えて、早く打ったりせんようにな。はじめ
に八小節、休止だぞ。

KV　八週間？

楽長　八小節と言ったのだ　こいつ八週間の休暇が欲しいんだろうな。そ
れはそうと、わしの見たところ、君の眼鏡にはレンズが入っとらんようだ。

KV　もう五年も前からです。踏んづけたら、こわれたんです。その時に、
全部レンズをはずしてしまつて以来、レンズはないんですよ。

楽長　どうして空の枠なんてかけてるのかね？　無意味じゃないか。

KV　何にもないよりマシですよ。

楽長　君はいつもうまい言い訳を思いつくな　さあ、始めよう。

KV　あなたにアンデルルがもう話しましたか？

楽長　何かね、彼はまだわしに用があるのかね？

KV　俺たちきのう偶然のできごとにぶつかったんです。きのう私とアンデ
ルルがカウフィンガー街を歩きながらちょうど自転車乗りの話をしていたんで

す。そしたら、俺たちが自転車乗りについて話したその瞬間に、偶然にも一台通りがかつたんですよ。

楽長 ふむ、それで？

KV それでって？

楽長 それで何が偶然なんだね？

KV 俺たちは自転車乗りのことを話してたんですよ。そして俺たちが自転車乗りの話をしてたその瞬間にですね、ちょうど一台通りがかつたんですよ。

楽長 ふむ。で、その自転車乗りがどうしたんだね？ そいつが何かしたのかね？

KV 何もしやしませんよ。通り過ぎていきましたよ。

楽長 それじゃ、その自転車乗りと何の偶然もないだろう。それはまったく何でもない。何でもないんだ。

KV あなたとは世界観がちがうんですね。

楽長 そんなのは偶然じゃない。カウフィンガー街で自転車乗りが通りがかつたって。あそこじゃ日に千もの自転車が行き来してるんだ。

KV ちがいますよ、たったの一台が来たんですよ。自転車乗りの話をして、千台通りがかつたのなら、偶然ではないでしょうがね。

楽長 もちろん一どきに来る訳じゃない。あそこじゃ、ほとんど一メートルおきに自転車が走ってるって、言っただよ。

KV でも、ちょうど話題にしてる時ではない。

楽長 自転車は、君たちが話題にしてなくたって、来ただろうよ。

KV さあ、それは知りませんが。

楽長 ああ、君たちが何か別の話をしてたのならな。

KV 別の話なんてしてませんよ。

楽長 わかつとる。ただ、わしは、例えば君たちが飛行機乗りの話をしてたらなっと思って思っただ

KV してませんよ。俺たちは自転車乗りの話をしてたんですよ。

楽長 わかつとるよ。ただわしは、もし君たちが飛行機乗りの話をしてたらなっと思って思っただ。そしてちょうどその瞬間に上空に一台飛んで来たのなら、これは偶然だったろうよ。

K V はあ 空は見上げませんでした。

楽長 わしはな、もし君たちが自転車乗りではなく飛行機乗りの話をしてたらなつて思つたんだよ。

K V どうしてですか？ 自転車乗りの話をしてるのに、どうして飛行機乗りの話ができるんです？

楽長 君たちは自転車乗りの話をしたのだから、飛行機乗りの話だってできただろうにつてわしは思つたんだ。

K V 不可能です。

楽長 そうか、君たちはかつて一度も飛行機乗りの話をしたことがないのかね？

K V 何度もありますよ でもきのうはちがう きのうは自転車乗りの話だけをしてたんですから。

楽長 もうやめてくれ。君の話はもう聞きたくない。

K V あしたまた俺たち散歩に行きます その時は飛行機乗りの話をしてみましょう でも残念ですね、もしその時、自転車乗りが通りがかったら。

(ここでとつもない演奏が始まる。この場末の楽団は『詩人と農夫』序曲を演奏する。楽長は熱をこめて指揮する。彼の付けネクタイは背中にぶら下がっている。両腕のゴム製の巻きカフスは次々に大きな弧を描いて飛んでいき、楽団員たちのまん中に落ちる。K Vの太鼓は常に出遅れ、変なときに打ち鳴らされる。その度に楽長の怒った目付きと手振りを浴び、この不運な臨時の太鼓たたきは身をよじつて陳謝の身振りを返す。この即興劇の最後を飾るこの序曲の間がありとあらゆるおかしな思いつきやグロテスクなギャグが演じられるが、それは言葉に表せない。いずれにせよ八人の楽士と楽長が、次第にくたくたになつてきたところで、ついに幕が下りる)